

二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版



BLACK CAT'S
ブラックキャッツ
真夜中の退魔師

小説 舞麗辞

挿絵 助三郎

プロローグ 魔夜中は別の顔

第一章 月島ハルカ

第二章 嘆きの黒

第三章 発情

第四章 淫魔蟲

第五章 狂辱輪舞

エピローグ 闇に踊る

006

026

050

091

146

198

254

登場人物紹介

Characters



つきしま
月島 ハルカ

猫の半妖「猫又」の女子校生。普段はヒトの姿をして正体を隠している。
月光を浴びると常人ならざる怪力と妖力を発揮する。

このえ りょうこ
九重 涼子

ハルカと一緒に妖魔に立ち向かう凄腕の女退魔師。鞭をつかって妖魔を粉砕する。

りゅうどう
龍堂

ハルカに恨みを持っている外道の妖術師。

ジル

謎の淫魔。

「なっ、なんでっ……!?」

月光の加護を受けた自分の力には絶対の自信があったハルカはすっかりと動揺し、紅眼を見開き叫ぶ。ましてや相手はあの龍堂。低級妖魔を召喚するしか脳のない、瞬殺できて当たり前のチンピラ妖術師のはずだ。そんな相手に完全に遊ばれている……黒猫少女の自信は音を立てて崩れ落ち、屈辱に表情が歪む。

「さすがにすげえ妖気だったぜえ？ でもな、この舌は妖気を食らうのよお。つまりてめえは俺をぶっ倒すつもりが、たっぷりと力を提供してくれたってわけだ」

ご丁寧に解説をつけながら、男はゲラゲラと下品な笑い声を上げる。

(そっ、そんな……そんな……)

悪魔に魂を売った男の変貌振りに、少女の身体は怒り以外の感情で震え始めていた。

「さあて、このまま罫り殺してやろうと思っただが、テメエの妖気はすげえ美味えなあ。今までの礼も兼ねて、まずはそいつをたっぷりと味わわせてもらおうとするか」

言うや、男は舌を引っ張って猫又を引き寄せる。好色な外道はりんど色をした少女の頬に顔を近づけくんくんと鼻を鳴らし、少女の甘い匂いを嗅ぎ回る。

「なかなかいい匂いだぜ……ガキのくせに一丁前に女の匂いがしてやがる」

ハルカは応えない。体臭を嗅がれるなど年頃の彼女にしてみればかなりの辱めだったがここで喚けばそれだけ男を悦ばせるだけだ。少女はただ下唇を精一杯に噛み締めて男の隙を窺っていた。しかしすぐにそれが無意味であることを思い知らされる。

「くっくっ……いい顔しやがるぜ、そんなに恥ずかしいかい？」

「な……？」

哑然とする猫耳少女。男の口振りは、まるでこちらの表情をすっかり捉えているかのようではないか。当てずっぽうだろうか、それとも——？

「何びっくりした顔してんだ？ ああ、目の見えねえ俺がどうしててめえの面まで分かるのか不思議なんだな？ 種明かししてやろうか、冥土の土産ってヤツによお……」

妖術師がそう告げると、その両耳から昨夜も姿を現した肉蔦が這い出てきた。しかし今度はその長さが尋常ではなかった。後から後から、ずるりずるりと際限なく伸びてくる。しかもところどころ太さが歪で、途中途中で毛細血管のように枝分かれしている。まるで脳髓が紐状に解けて耳から出てきているようで、ハルカは気味の悪さに目を背けてしまう。ようやく耳穴から全身が抜け出た肉蔦は引力によってべちゃりと地面に叩きつけられたが、すぐに無数の血管でもって直立した。

「つまり私たちが、マスター・リュウドウの目代わりなのですよ」

立ち上がった肉蔦は何と自分でしゃべり始めた。その奇怪極まりない姿をよく見れば、目玉や口が福笑いのようにでたらめの場所についている。

男は彼らの言葉を頼りに周囲の状況を逐次把握していたのだ。

「紹介するぜえ。俺の右耳に居たのが甲^ア。左耳に居たのが乙^オだ。さて……このままじゃちよいと面倒だな。甲、乙。呪縛しろ」

少女を舌で捕縛し続ける呪術師が命令すると、甲と乙と呼ばれた二体の怪異が動いた。つつつつつ、とハルカの手の甲を愛撫するように肉鳶が撫でる。

「ひうっ!？」

すると少女の腕は麻酔を打たれたかの如く弛緩し、だらりと力なく垂れてしまった。どうにかして動かそうと試みるが、まるで神経を寸断されてしまったかのように腕は自らの意思を聞いてくれない。

「正直言つて最初の一撃にはびびったからな。おいたができねえように、な」

両脚にも同様の呪をかけられた紅眼はがくんつ、と膝から崩れ落ちる。少女は今や魔舌に支えられていることで何とか直立を維持している状態だ。

「完了しました」

乙の言葉に頷き、猫又少女を縛り付けていた魔舌を緩める妖術師。力の入らない少女の身体は重力に負け、糸の切れた操り人形のようにぐにやりと地面に横たわるしかない。ねっとりとした魔舌の粘液にまみれたその姿は産み落とされたばかりの子馬のようにぬらぬらと濡れ光っていた。

「その椅子に座らせてやれ」

男の指図に甲・乙が何本もの肉鳶を黒耳少女と床の間に潜り込ませ、細身の身体を持ち上げる。小柄な少女とはいえ四十キロそこそこはある猫又少女の肉体を、一本一センチ前後の鳶でいとも軽々と持ち上げ、黒皮張りの椅子へと運ぶ奇怪な使い魔たち。

彼らはお尻の下敷きにならないよう尻尾を巧みに逃がしながら、少女を深々と腰掛けさせる。続いて甲が椅子の背後にあるレバーを引くと、がくんつ、と背もたれが後方に倒れ、黒猫少女は中途半端に横たえさせられる。しかしそれだけでは終わらない。鳶はハルカの足首に絡みつくつと、ぐつと股を左右に大きく割り開きにかかった。

「やっ、やめろおっ！」

相手の意図を察して必死に開脚を拒む紅眼少女。下着越しとはいえ大事な部分を晒されるのなど耐えられない、しかもそれを強制されるとなればなおさらだ。

(いやっ、そんなの絶対やだっ!!)

恥辱を嫌う乙女の抵抗力たるや凄まじい。呪縛の届かない内股の力だけで怪力を有する使い魔を阻止してみせる。呪縛された手足からもパチパチと漏電するような音が鳴り出す。

これには使い魔らも慌て始めた。

「マスター、ハルカ様のお力は想像以上です。やはりアレを封じた方がよろしいかと」

甲の進言に少々渋い顔をする龍堂。

「ちっ、このままの方が極上の味なんだがな。仕方ない、甲・乙、月光を遮断しろ」

主の許可を得た使い魔らはひよろ長い食指を数本、窓の方へと伸ばす。

シャアアアアッ、という乾いた音と共にあらかじめ設置してあったらしいブラインドが一斉に落とされ、窓という窓を塞ぐ。

室内は一気に真っ暗闇へと変化した。とはいえ闇目の利くハルカはもちろんのこと、全

盲の龍堂にとつても明かりがないこと自体は何ら意味をなさなかった。

だが月光を奪われたことは、猫又少女にとつては致命的だった。

「ひゃあつ、力が……抜けっちゃあうっ!？」

妖力の源たる月の明かりを絶たれたハルカはあっけなく股を割かれてしまい、脚はそのまま肘掛けに引っ掛けられる。

その様は産婦人科の診察台に寝かされる患者のようでもあった。両脚をほぼ百八十度近い角度で割り開かれた猫耳少女の股座はスカートが完全に捲れ上がって隠されていた純白のシヨーツが丸出しになっていた。

大きく股を裂かれたことで白下着は股座にぐっと食い込み、ぷくっとして何とも柔らかそうな恥丘の丸みを浮き立たせる。尻房を包むべき部分の布も縊れ、尻割れに挟まってTバックと見紛うほどだ。それまでの激しい運動のせいできつとりと濡れていた肌は薄布をびったりと張りつかせており、おかげで股布越しにでも恥丘から会陰までを走るスリットの秘めやかな形状までもしっかりと見せつけてしまう。

「くうっ……こんな格好させるなあっ！」

屈辱的な姿勢をとらされ首を振って吠える猫又少女。いくらミニのスカートを穿いているとはいえ、パンツを見られるのはやっぱり恥ずかしい。しかも相手は下着を見ているというより布一枚隔てた秘所を視姦しているのだ。

「こんな格好、か。おい、化け猫がどうなってるのか説明しろよ」

いやらしく顔を歪ませ使い魔に命令する妖術師。それに応えるように甲と乙は次々と、
「ハルカさんはマスターに向かい、仰向けのままM字開脚をなさっています」

「白いショーツが丸見えですよ」

曝け出された乙女の、下着越しの恥部の状況を主に向かって説明してゆく。彼らもまた、
闇に視界を左右されならしい。

「いやっ、言うな、そんなことっ!!」

自分の恥ずべき場所がどうなっているのかを言語化され、ハルカは頬を赤くして叫ぶ。

「よし、俺が確かめてやるぜ」

男が手を水平に上げると使い魔らが鳶を伸ばし両手に絡める。それを伝うようにして一
歩一歩、妖術師が身動きの取れない猫耳少女の元へと迫るや、がばあっ!! 開ききった少
女の股座の間に立った男は覆い被さるようにして抱きついてきた。

「いやあっ! やめろこの変態っ!」

嫌悪からそう叫び、口を大きく開いたのが失敗だった。鼻と鼻がぶつかりそうなほど接
近したそれを見計らったかのように男の分厚い両唇の間から魔舌が放たれ、可憐な黒猫少
女の口元へと侵入してしまったのだ。

「んぶうっ!?!」

凶太い肉塊を頬張らされて、くぐもった悲鳴を上げる猫又少女。舌は構わずぐねぐねと
忙しく蠢き、少女の口内を好き放題に蹂躪しにかかる。

上顎から頬の内側、桃色の肉舌まで縦横無尽に舐め回されて、猫耳少女はおぞましさに鳥肌を立てる。

(ふぁ、ファーストキスだったのっ!?)

紅い瞳を見開いて鼻と鼻がぶつかりそうな距離にある仇の顔を映すハルカ。純愛に憧憬を持つ年頃の彼女にとつて突然の口辱は、生半可な暴力よりよほどショックが大きかった。(こっ、このおっ!!)

口腔内を暴れ回る魔舌に牙を突き立てる半妖少女。噛み千切れとばかりに紫の腐肉に深々と食い込ませるも、

「へへ、効かねえよ。それともチンポに見立ててフェラの練習でもしてんのかよ」

ゲラゲラと下品に笑い、男はなおも舌を猫又の喉奥へと潜り込ませてくる。

「もごおっ、むおっ……」

食道にまで侵入されえなく紅眼少女。気道を封じられて酸素不足に陥った脳がぼんやりと霞む。激しく首を振って逃げようとあがくが、男は少女の小さな頭をがっちりと押さえ込みそれを許さない。

魔舌は少女の唾液をくまなく舐め取り、代わりにむせ返るような腐臭の粘液を口腔粘膜に擦り込んでくる。男の唾液は吐き気がするほど生臭かったが、同時に嫌に甘ったるい。その臭いと味が鼻腔と味蕾に染みてゆきにつれ、変に呼吸が荒くなってしまう。

散々口内を弄んでから、舌はようやくハルカの口から抜き取られた。娘の柔らかな桃色



の唇との別れを惜しむように、唾液がねつとりと糸を引く。

「ふはあっ……はあっ、はあっ……許さないから」

ようやく呼吸を取り戻した猫又は数度大きく息を吸うと、すかさず龍堂に怒りの視線を浴びせかける。

「許して欲しいのはてめえの方だろが？ まあ俺は許してなんぞやらんがな……へへへ」

男は舌先でハルカの細頸から喉元をなぞるように舐め、ほとんど起伏のない喉仏の辺りをれるれろと舐め上げる。

「ひゃうっ、そこだめっ、やめっ」

堪らず身悶える猫耳少女。首元は彼女の隠れた性感帯の一つだったのだ。少女の反応に気をよくした龍堂は一旦舌を引っ込めると、分厚い唇を突き出し少女の首元へとむしゃぶりついてくる。

「ひいあっ!? だっ、だめ、やめろおっ!!」

じゅるじゅると唾液を含んだ口で吸い付かれ喉仏を愛撫されて、黒猫少女が絶叫する。首元を吸われるたび、舌先で舐め回されるたびに背筋がぞくぞくとする。大声を上げたことで激しく上下する喉元を前歯で甘噛みされ、更にじつくりとしゃぶり尽くされる。少女自身はくすぐったい、という感覚として捉えていたが、それは紛れもなく性的な快感に他ならなかった。

「いいぜえ、この調子でテメエの身体中から妖気を奪い尽くしてやる……お次はここだ」

男の手は探るようにして何度が黒猫少女の胴体を撫で回した後、ワンピース越しの幼い乳峰に狙いを定める。龍堂は魔舌を数度、少女の胸元でくねらせる。まるで左右二つの獲物のどちらを先に食ろうか思案するように。そしてまもなくびちゃっ、と濡れた音を立てて舌腹が左胸全体を包むように押し付けられてきた。

「きゃあっ!!」

胸を襲うおぞましい感触に、猫又が女の子らしい悲鳴を上げる。

「へへ、テメエブラもしてねえのか」

胸の膨らみを舌で押し込みながら龍堂が笑った。男の言葉通り、唾液に濡れる猫耳少女の乳房は黒衣を押し上げるように乳首がはつきりと浮き出ていた。使い魔らも興味津々で少女の膝小僧の上に陣取り、鳶を伸ばし超至近距離からまだ発展途上の乳丘をまじまじと観察してくる。

「もう乳首を勃^たたせてらっしゃるじゃないですか」

使い魔に発情乳首を意地悪く指摘されてしまう。ハルカの胸先は布一枚挟んだ舐り責めに早くも充血し、チクチクと疼きながら膨らみ始めていた。

「くくく、いつも勃起乳首見せびらかして歩いてんのか？ とんだ変態猫だぜ」

妖術師の侮蔑にギリギリと歯軋りを立てて歯嚙みする猫又。胸先が硬く尖ってしまっているのは事実なのでろくに言い返すこともできない。

「くうっ……」

「きゃああああうつつ!! おちんちんが挿入^はつてくるうう——つつ!!」

「このおつ! ハルカから離れるおおつ!!」

既に充分過ぎるほど濡れそぼって男根を受け入れる態勢を整えていた少女の膣道は、侵入してきた肉棒をやすやすと迎え入れてしまう。と、張り出したエラが膣口を潜った辺りでペニスが何かに突き当たり、ずんつ、という鈍痛が下腹部に銅鑼の如く響いた。全てはハルカの胎内で巻き起こった感覚だが、感覚転移の魔術のせいであらゆる全てが手に取るようになる。

「やめろお——つつ!!」

手にした鞭を振りかざし、陵辱者目掛け振り下ろそうとした女退魔師だったが、一歩遅かった。ハルカの腰を抱えた男子が一思いに牝尻を己の股間へと引き寄せた。

ぐっ…っ…ずるるるるうう——つつ…!!

一際強い抵抗の後、何かの張り裂ける音。するとそれまでの抵抗が嘘のようになくなって、男根は根元まで一気に膣口へと飲み込まれていった。

『ああああああああああああああああああ——つつつ!!』

ハルカが、そして涼子が同時に叫んだ。股座から脳天までを刺し貫かれるような処女喪失の激感。一生に一度しか味わうことがないはずの峻烈なる衝撃。

しかも処女膜を裂かれる痛みさえ、淫魔蟲は被虐の悦びに書き換えてしまう。下腹部で炸裂した衝撃に、前方の猫又は紅眼を限界まで見開き身体中をピンと突っ張らせている。

「ひきやあああああつっ!! 挿入ってるっ、膣内に挿入っちゃってるうううっ!!」

胎内から感じる牡の熱氣と硬さとに黒猫少女は涎を垂らして吠え喘ぐ。そんな仲間の姿を目の前にして、涼子の方は振りかざしたままの鞭も落とし、内股になったまま完全に硬直してしまった。人生で本来ならただ一度だけ経験する処女喪失の激感。それを女として成熟した肉体を持つ今、再び味わわされるそれはかつて少女だった頃そのままの衝撃でもって美女の姫割れを一閃した。

「はあああああつ?! これってっ! この感じってええっつ?!」

二度目の処女喪失が発した切なさに涼子が身を震わせる。この好機を淫魔が見逃すはずもなく、符の攻撃を逃れた数本の触手が四方から伸びて無防備な美女の四肢に巻きついた。「うぐっう……!! しまっ……たっ!!」

己の不覚に悔恨の声を上げるが全ては後の祭り。

「くくっ、ぬかったな九重涼子!」

数本の触手を残し人型に戻った淫魔が高笑いを上げる。

ギチギチギチッ!!

捕らわれの女退魔師は両腕を天高く掲げる形で拘束されたまま、極太の触手に跨ぐようにして腰を下ろさせられてしまう。触手は成人男子の胴回りよりも太く、まるで馬の背に跨がっているかのよう。しかし乗馬で言えば鞍の部分には親指第一関節大の突起がびっしりと生え、密着する美女の股座から内股までに強烈な違和感を与えていた。

「ひっ、やだっ、気持ち悪いっ！」

グロテスクな魔肉に座らせられ、おぞましきあまり身体中に鳥肌が立った。突起は牝腰の重みにひしゃげながらもこりこりとした軟骨のような感触でやわな牝肉を捏ねる。ちようど真下から陰核を刺され、ビリッとした淫らな電気が恥裂を走った。逆に肉割れから会陰に感じる突起はじいんっ、と粘膜に染み込んでゆくような邪悪な優しさに満ちていた。腐肉の分泌する粘液の気味悪い感触がストッキングからTバックにまで染み込んで強烈な不快感を生む。そしてそれを上塗りするように、嫌に温かな触手の温もりが股間を包むのだ。

ずりいっつ……ぬめった擦り音を立てて、触手が動いた。

「いっ、やめろおおおっつ!!」

ゆっくりと、しかし確実に肉丸太は股座を摩擦しながら移動する。その動きは緩慢だったが、そのせいで触手の表皮に生え揃う突起の形状まで嫌味なほどはつきりと牝肉に教え込まれる。縦横無尽に飛び出した突起は内股を撫でては背筋がゾクツとするような喜びを生み、股布越しの陰裂をなぞっては腰が抜けてしまうくらいの快感を植えつける。

「はひいっ!! うっ、動くなっ、動くなああ……!!」

逃げようにも両手を振じ上げられてはどうしようもない。必死に腰を浮かして恥辱から逃れようとするも、極太触手は女豹の股座を決して逃さず、ぴったりと密着して突起の一つ一つをたっぷりと味わわせてくる。肉真珠はチリチリと火花を散らし、陰裂が蕩けた。

(くそっ、油断したわ……どうする!!)

一世一代の不覚に奥歯が砕け散るほど女豹退魔師は菌囓みする。とにかくこのままでは反撃どころか逃げることもできない。とはいえ幸い相手は淫魔、いきなり食い殺されることはないだろう。となれば、屈辱的だが責めに耐えて反撃の機会を窺うしかない。

取るべき手段は決まった。後は責めるジルと責められる涼子の一騎打ちだ。

(くっ、こんな責め、どうってことないっ……)

自分に言い聞かせるように胸中で呟く女退魔師。今までは性的攻撃に脆弱なハルカの性感を転移されていたから不覚を取ったが、今責められているのは自分自身の肉体。それならいくらでも堪えようがあるはずだ。だが、女が心を氷のように冷たくして淫らな刺激をやり過ぎそうとすれば、その固く閉ざした心をこじ開けんと淫魔の攻撃も変化してくる。

ずりっ、ずりいっ……触手は次第に速度を増し、その動作も一方のみから前後運動へ。

「んくふうっ!? そっ、そんなっ……速っすぎ……んんうっ……!」

擦り責めの速度が上がって突起に延々と抉り立てられるまでにエスカレートすると、牝割れは火を噴くほどに熱されて下着奥に秘められた肉薔薇を淫靡に咲き乱れさせてしまう。

突起の餌食となったのは恥裂だけではない。その成熟した豊満な巨桃、その尻割れの奥に隠れる菊座にも、触手の魔突起は容赦なく襲い掛かった。括約筋を連打するように打ち据える突起群。舐めるように、時に食い込むように桃穴を撃つ腐肉の責め。ズンツズンツと腰骨にまで響く鈍撃は快楽と共に排泄欲をも刺激するようで、尻たぶから背筋を駆け上

がる恥悦に涼子は下唇を噛み締めて耐え忍ぶ。

(こっ、これくらいっ……これくらい……)

気丈な女退魔師は襲い来る淫悦を抑え込もうとするが、触手の股責めがもたらす甘美な毒悦にその腰は蕩けそうだった。結果重力に抗う力を失った下半身に更に肉鞍が密着し、媚肉を挟り取らんばかりに突起がめり込む。

「ふうっんっ……！」

ミニのスカートは豊満な尻房を半ばまで剥き出すほどに捲れ上がり、Tバックの大人びた黒下着が覗く。巨尻はストッキング越しでも分かるほど薄紅色に上気し、そのすぐ下を我が物顔で行き来する魔性の巨大触手に合わせふるふる淫猥に躍っていた。

丸太触手の擦り責めは尋常ではない速度にまで達していたが、触手表面の粘液のおかげで柔肌の擦れる痛みは全くない。その上触手の粘液は媚毒であるらしく、液体の染み込んだ股布やストッキングの内股部分は他の部位と比べて薄皮一枚剥がれたように敏感に、淫らに改造されていた。粘液に張りついた股布から透けるクレヴァースに次々と魔突起が突き刺さり、甘い刺激に疼く子宮は液状化して淫蜜と共に流れ出してしまいそうなほどだった。(だめ……このまま続けられたら、擦られるだけで……)

敗北の予感に戦慄する涼子。何とかこの淫ら責めに抗う手を考えなくては……だが淫魔は女退魔師にそれ以上思考する暇さえ与えなかった。股座を襲う突起、その先端がくつと窪み、無数の吸盤と化したのだ。吸盤はそのまま美女の美味そうな肉丘に、尻たぶに、あ



い痺れを生んでしまう。

「胸がつ、おっぱいがあるっ!? ダメになるっ、またダメにされるううっ!!」

鉦石の如き硬度の乳首は許容を超えてなお送り込まれる血液に圧倒され、膨れきった見た目とは裏腹に萎縮する乳神経の圧迫に痛々しいほどの激感を味わさせられた。

「くく、また胸だけで果てるつもりか? この淫乱ウシ女め!」

ジルの蔑みに退魔師としての矜持を揺さぶられる涼子だが、乳の激感には止められない。

「あああああああつ、だつてえええええつ!! 胸がつ! おかしくなってるっ、私の胸もおかしくなっちゃってるのよおとおおつ!!」

美女の身悶えに合わせ乳果実はぶるんぶるんと踊り狂い、乳奥から灼熱の乳悦を湧き立たせて爆乳全体をジンッつと震わせる。まだ弾け飛ばないのが不思議なくらい膨張し充血しきった乳豆へ触手鈴口が噛み付いた。

「きひいいいッ!? おっぱい弾けるっ、はじけとぶううう——っつ!!」

勃起乳首をちゅうちゅうと啜られると、心臓が止まりそうなほどの淫激に巨乳を刺し貫かれる。乳豆はそこだけを火炙りに晒されたようにヒリヒリして、淫らな爛れを肉釣鐘全体に広げてしまう。

「あひいいいんっ、イクうっ、またイっちやうううう——ッツ!!」

びくんっびくんっ!! 股座に触手胴体を挟ませられての素股責めに屈したハルカが派手に全身を躍らせ、汗と愛液、精液に触手粘液とあらゆる淫液の混合物を飛散させながら天

高く飛翔する。少女が果てるのは彼女が処女を奪われてから早五度目。黒猫少女が絶頂を迎えると、その真つ白な快感の波を共有させられている女退魔師もまた子宮に直接なだれ込んでくる牝の悦びに引きずられて果ててしまうのだ。

「んっ、んんんっ〜ッ!!」

ぎゅつと目を閉ざし襲い来る荒波をやり過ごすが、牝肉には無数の泡が弾けるように快感が爆発して牝神経をじりじりと焦げつかせ燻らせる。しかも女が目を閉ざしているのいいことに、大きく開かされた股座にもそろそろと触手が忍び寄っていた。

ずぶぶぶぶぶぶううう——ッッ!!

「あひいひいひい——っっ!!」

女陰に、菊座に。大きく割り裂かれた牝の股座へと二本の触手が潜り込んだ。腐肉は女性の奥底まで侵犯するように深く深く潜り込み、腔壁と腸管を押し広げ擦り責める。

ヒトのペニスと異なりあらゆる制約から解き放たれている肉触手は、牝を淫獄に墮とすその術を心得た動きで女退魔師の肉穴を責め立てる。

「あはあああ、奥っ、奥まで当たってるうう——ッ!!」

触手の亀頭に子宮口を激しくノックされ、股間から脳天までを突き抜ける稲妻のような淫激に黒い女豹は喉奥から淫らな牝声を搾り出してしまふ。

ずぶっ、ずぶっ、ずぶっ、ずぶっ、ずぬっちゅっ、ぐにゆるるうう——っっ!!

腔口が、肛門が、徹底的に押し広げられほじくられた。腐肉は愛液と腸液を掻き出し、

牝粘膜に卑猥な媚毒を塗りたくる。特に膣道には念入りに摩擦が行われ、これから始まる蟲出産の準備を着々と整えてゆく。

「にゃはあぁっ♥ いひいっ！ しゅごいのっ、お尻がしゅごいのお——っ!!」

ハルカの桃尻にも二本の触手が深々と刺し込まれ蠢いていた。排泄孔いっぱい頬張らされた触手の凄まじい蠕動に、牝猫少女が声をからして喘ぎまくる。

ぶびっ、ぶちゅっ、びぶっ、ぶびびいいっっ!!

皺の伸びきった肛門と赤紫色の触手の隙間では、泡立った腸液が直腸内に漏れ入った空気が混じり死にたいほど恥辱的な粘っこい破裂音を鳴らし続けていた。

涼子の桃穴にも肛辱の恥悦が伝わり、自身の菊座で食い締める触手の鈍い快感が膨らむ。ぐちゆるるりっ！ ずるるぶちゅっ!!

亀頭が腸壁を押し分けて入り込めば逆流する異物感が、引き抜かれれば排便の開放感にも似た灼熱が腸管を突き抜けた。

「はんっ、はぁううっ、はぐぶうっ!？」

口を「あ」の形にしたまま喘ぎ鳴いていた女豹は突然その口へと触手に飛び込まれる。喉奥を叩かれえずく女退魔師を無視して生臭い腐肉は口腔陵辱を開始した。味蕾に広がる触手粘液の味は変に甘ったるく嚙下したそばから全身の感度が鋭さを増してゆくよう。

媚毒。そんな言葉が脳裏に浮かんだが、口内の触手が抜き差しを始めることで口が女陰に改造されたように甘い快楽を生み出してそれ以上考えることを許してくれない。

身体中の穴を塞ぐ触手の蠢きに呼応するように、蟲の胎動もまた激しさを増してゆく。どくんっ、と蟲が一つ身じろげば、それだけで果ててしまいそうになる。

ズブズブズブズブズブズ……肉穴をほじる触手のスピードも加速度的に速まってきた。腕や脚、胸や細腰に絡む肉紐もぬるにぬると肌を摩擦して細胞一つ一つを淫らに狂わせる。捕らえた牝の興奮に同調するようにして、触手は淫穴を犯すもの以外もその淫らな蠢きを激化させていた。ブブブブルルル……乳釣鐘に巻きついた肉紐が細かな振動を開始した。柔らかな乳肌は淫魔によるバイブレーションにたぶたぶと波打ち、中の柔肉をとろとろに蕩かせてしまうかのよう。乳先から乳腺を走っていた甘い痺れは今や豊満な乳肉全体をズキズキと疼かせ女豹を追い詰める。

「いやあああああつ、おっぱいいいっ、またっ！ また噴いちゃうううっ！！」
びゅるるるっ、びゅるっ、びゅしゅるるるんっ！！

がちがちに充血した乳先からまたも母乳を噴かされ、涼子が甲高い声を響かせる。噴き上がったミルクは真正面で合わせ鏡のように犯されている猫耳少女へと降り注ぐ。

「ふみやあああうんっ、りよおこのみるくううっ、甘いのおおっ♡」

降りかかった乳白色の水流に、黒猫少女は舌を突き出し舐め喘ぐ。媚毒まじりの母乳は猫又を更なる浮獄の底へと突き落とし、感覚を共にする女退魔師をも道連れに墮ちてゆく。女退魔師の高まりを察し、彼女の頬を摩擦していた亀頭は黒レザーの女豹を睨むように構え、そのまま精を放った。

ぶびゆるるるる——つつ!!

「ぶはああつつ!? あぶうつ、んくひいいつつ!!」

ヒトの射精とは桁の違う凄まじい放精。生々しい粘液の激流に顔面をしたたか打たれて、黒女豹は精に溺れるように口を開閉させて喘ぎ鳴いた。首元に胸元、脇下、胴体、両手両脚の先に至るまで、涼子のあらゆる部位を苛めていた触手亀頭も次々と射精を始めた。

どびゅつ、どびゅりゅう〜つ!

びゅくんつ、びるるつ、びるるうう——!!

巻きつく触手が次から次へと脈打って輸精管内を腐液が走り——媚薬粘液を撒き散らす。

「んぶうふうつ、すごいニオイつ、この臭いニオイ堪らないのおつ!!」

魔性の媚薬粘液はザーメンの臭いがした。牝の性臭に牝の本能が反応し、本来であれば吐き気を禁じ得ない凄まじい臭いを耐え難い媚薬臭のように感じてしまう。

「臭い? くく、臭いのはお前の方じゃないのか九重涼子?」

銀髪の魔性は邪悪に歪んだ笑みを浮かべて女退魔師に問いかけた。

「ふえっ!? わ……たし……?」

「お前のそのレザー、男どものザーメンが染みついてんだろ? もちろんお前の汗もたつぷりと……いや、それだけじゃない。ケツ穴やらマ○コやら、身体中からスケベな汁の臭いをプンプンさせやがって。男子生徒や俺の精液よりな、てめえが一番くせえんだよ!!」

淫魔の言葉を耳にした途端、強烈な精液の臭いに混じって鼻腔を突く己の媚臭に気づか

狂い鳴いた。女退魔師の豊満な女体に乳悦が、肛悦が、恥悦が。ありとあらゆる淫悦が怒涛の如く襲い掛かって身体を芯から痺れさせ、狂わせる。

びくっびくびくびく——っ!! 牝穴の食いちぎらんばかりの締め付けに堪らず痺攣する触手ども。そしてとうとう胎内と直腸内部の触手が精を放つ。

どびゆるるるるううう——っ!!

「くひいいいい——っ!? アソコとお尻がああっ、両方とも狂っちゃううっ!!」

子宮とお腹の中に大量の熱い迸りを受け止めて、涼子はまたも絶頂へと追い立てられる。

「あひやはああうっ!? お腹の中があっ、お腹壊われちゃあ——っ!!」

粘膜孔を媚毒に満たされる淫悦たるや女退魔師の予想を遥かに超越した凄まじい魔悦。それまで牝穴を襲った牡に受けた刺激全てを合わせても到底及ばないほどの淫悦は、まさに気がふれてしまいそうなほどだ。

触手どもは射精を終えてなお前後の秘門を侵犯し続け、びくびくともんどりうっている。その硬度は高まるばかり、まだまだ捕らえた牝を解放する気はないらしい。

「ああうっ、んっ、はあっ、ふうう……」

極まったことで全身を刺し貫くような激感が柔らかな羽根布団のように変わり、女豹と牝猫も荒い息と秘めやかな喘ぎを漏らす程度まで落ち着く。だがそれも長くは続かない。

「あっ、あ……あああああああっ!!」

絶頂直後のふわふわとした夢遊感覚に酔いしれていた女の切ない鳴き声が突如奇声に取



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

